



Title	日本社会における名前の流行と受容：命名論争の生成過程に関する計量研究
Author(s)	久山, 健太
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/56034
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (久山 健太)

論文題名

日本社会における名前の流行と受容—命名論争の生成過程に関する計量研究—

論文内容の要旨

本研究では、日本社会における名前の流行現象の実態と名前に対する人々の意識について計量分析を行い、近年の子どもの名前をめぐる論争（命名論争）の社会的背景を解明する。理論面では S. Lieberson の social taste 論の枠組みを基礎に据えた上で、C. Lévi-Strauss の分類体系と差異化／同化の理論、P. Bourdieu の文化資本の理論、J. S. Coleman の社会規範の理論的知見も取り入れ、命名論争が生じる構図を説明する。方法論の面では、J. K. Skipper の主観的階層（階級）判断の研究を応用する。

第1章では、名前をめぐる社会学領域の研究状況を整理するとともに、命名論争および名前の流行現象を研究する意義を説明した。

第2章では、命名論争の経緯と争点を整理し、現在の命名論争の前提となっている日本の命名文化の特徴について考察を行った。その特徴とは、漢字と仮名から構成される二重の表記体系が難読化の顕著な影響を及ぼしていること、欧米圏と比較して時系列変動が大きいこと、および改名制度と夫婦同姓制度による大きな制約が存在することである。また、命名論争の構図を解明する上では、そのような命名パターンの変動に対する他者の視点を考慮に入れることも不可欠である。

第3章では、命名論争の諸問題を最も体系的に説明できる社会理論として、Lieberson の social taste 論の詳細を明らかにした。まず、流行の変動過程を説明する「模倣モデル」と「階層別モデル」との関係性、変動に影響を及ぼす外的要因と内的要因との区別、内的・自動的な変動を生み出す「歯車効果」について概要を述べた。次に、Skipper の方法論の応用によって獲得が期待される理論的知見を明確化した。さらに、本研究が分析対象とする日本の名前の social taste の候補として、「流行時期」「難読性」「性別推測困難性」という三種類の要因を挙げた。

第4章では、social taste 論を応用する形で、ミクロの社会的行為とマクロの社会構造を接合する理論体系の知見を用いて、現代の命名論争が生じる構図を考察した。

第5章では、二種類の命名ランキングをデータとして使用し、100年間の日本の名前の social taste について全体像を把握した。順位相関係数からは、男性名と女性名とで異なる変動の形が生じていることが分かった、また、変動の最も顕著な要因は接尾辞と性別との関係の経時的変化であり、女性名は長期間出現する接尾辞「-子」によって命名パターンに大きな制約を受けていた。

第6章では、本研究独自のインターネット調査を実施し、そのデータを用いてコンジョイント分析（ランクロジットモデル）による主観的階層判断の分析を行った。その結果、Skipper の知見を支持する形で、名前のみに基づく判断が生じることが明らかになった。想定した「流行時期」「難読性」「性別推測困難性」という三種類の social taste は、重要度の違いはあるが、全て階層判断に影響を及ぼしていた。また、いずれも最も革新的な命名パターンの水準が低い階層に位置づけられるが、従来型の規範に従った命名パターンの中では、最も単純なものではなく一工夫あるパターンが高い階層に位置づけられるという、曲線的な効果が検出された。

第7章では、階層判断の分析を下位集団別に行った。その結果、判断の結果が調査対象者自身の属性（下位集団）によっても大きく異なることが分かった。また、因子変数の高低も結果に影響を及ぼしており、文化資本因子は保守的命名規範因子と同方向の効果を示しているのに対し、共同体規範因子は反対方向かつ局所的な効果を示していた。

第8章では、無意識的な階層判断と対置する形で、明示的な命名規範の分類とその規定要因を分析した。その結果、一つの価値判断の軸には還元できない複数の命名規範の存在が明らかになった。また、個々の属性変数は直接効果のみならず、文化資本・共同体規範を経由する媒介効果を命名規範に対して及ぼしていることが分かった。

第9章では、上記の知見を総合し、現代日本社会に並存する多様な下位集団とその命名体系について議論を行った。これらの命名体系は互いに共通する部分を持ちつつも、構成員の社会的属性や文化資本・共同体規範の影響を受けて異なる social taste を生み出している。異なる taste を持つ者同士が出会った時、命名論争が生起するものと考えられる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (久 山 健 太)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	川端 亮
	副 査	教授	吉川 徹
	副 査	准教授	辻 大介

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本社会における命名を取り上げ、名前の流行の実態とその受容のあり方を理論的にまた実証的に解明するものである。

マクロな名前の流行のメカニズムについては、リーバーソンのsocial taste論を中心にすえ、レヴィ＝ストロースによって、名前の集団内での機能を論じる。そして、命名に対する制約を制度的次元、社会規範の次元、文化的次元の3つ次元として再定義する。さらに社会規範の次元ではコールマンを、文化的次元ではブルデュアの議論を用いて、差異化、同化、社会規範、文化資本の諸概念を織り込んだ体系的な説明図式が精緻に構成されている。

実証的な分析においては、命名ランキングの変動の分析から、男性名と女性名のそれぞれのこの100年間の変動が詳細に記述され、平成初頭には大きな変動があったが、近年は安定的な局面を迎えており、名前の多様化という現象は、ランキングにおいては見られないことが示される。また、インターネットによる調査を実施し、コンジョイント分析の結果から、人々は他の情報が一切なくても名前だけによって、その人の階層を判断することが日本で初めて明らかにされ、ごく最近のはやりの名前、読みにくい名前、性別が分からない名前は低く判断されるとともに、昔にはやった名前や性別がはっきりと分かる名前も低く判断されることが明らかになった。このように日本社会全体で共有されている命名体系が存在することとともに、social tasteの異なる下位集団もまた存在することが示唆される。それは、性別や年齢、学歴などによって、昭和の半ばから後期にかけてはやった名前、漢字を辞典に載っている読み方で使う名前、男女のどちらか一方の性にしか使わない名前を高く評価する程度が異なるからである。さらに規範意識や文化資本を測定し、それらと主観的な階層判断の高低に関連があることを示す。

これらの分析から、日本社会において、命名に対して考え方が異なる何らかの下位集団は存在するが、それは性別や年齢などで単純に切り分けられる集団ではなく、さらに細かく分けられると考えられる。日本社会には多様な下位集団があり、それぞれが独自の命名体系を有しており、それ故に社会においては、複数の命名体系がある。似た属性を持ち、接触頻度が高い集団内であってもそれぞれの構成員が有しているsocial tasteは少しずつ異なるため、名前の話題になると論争に発展する場合がある。また、社会規範の次元と文化的次元が下位集団ごとに異なっていることから、全体社会の法的な命名規則の枠内で、工夫を凝らす差異化や集団内の命名規範への同化が命名行為とそれに対する意識を形作ると論じられている。このように、日本社会の法制度の中で、性別や年齢、さらに細かい要因によって、また共同体規範の内面化の程度、文化資本によって異なるsocial tasteを生み出しているために、命名論争が生じるのである。

名前については、メディアで取り上げられたり、研究者が部分的に論評することは、近年しばしばみられているが、日本の社会学の研究で、名前を正面から取り上げ、体系的に論じた研究は、本研究が初めてである。海外の研究や法学や人類学、民俗学などの研究など、幅広く先行研究をとりあげて検討し、またメディアで取り上げられるような言説にも触れ、それらを体系的に整理した点、社会学の概念を用いた一貫した枠組みを作り上げている点、日本の命名論争を理論的に分析し、なおかつ調査データを計量的に分析し、social tasteの存在を明らかにした点は、本研究の大きな意義である。

以上により、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいと判断された。